

# (財)和歌山県文化財センター年報

1 9 9 9

財団法人 和歌山県文化財センター



1. 高田土居(城)跡 堀1・2全景 (北西から)



2. 西庄4号墳全景 (北西から)





3. 東照宮本殿



4. 東照宮楼門



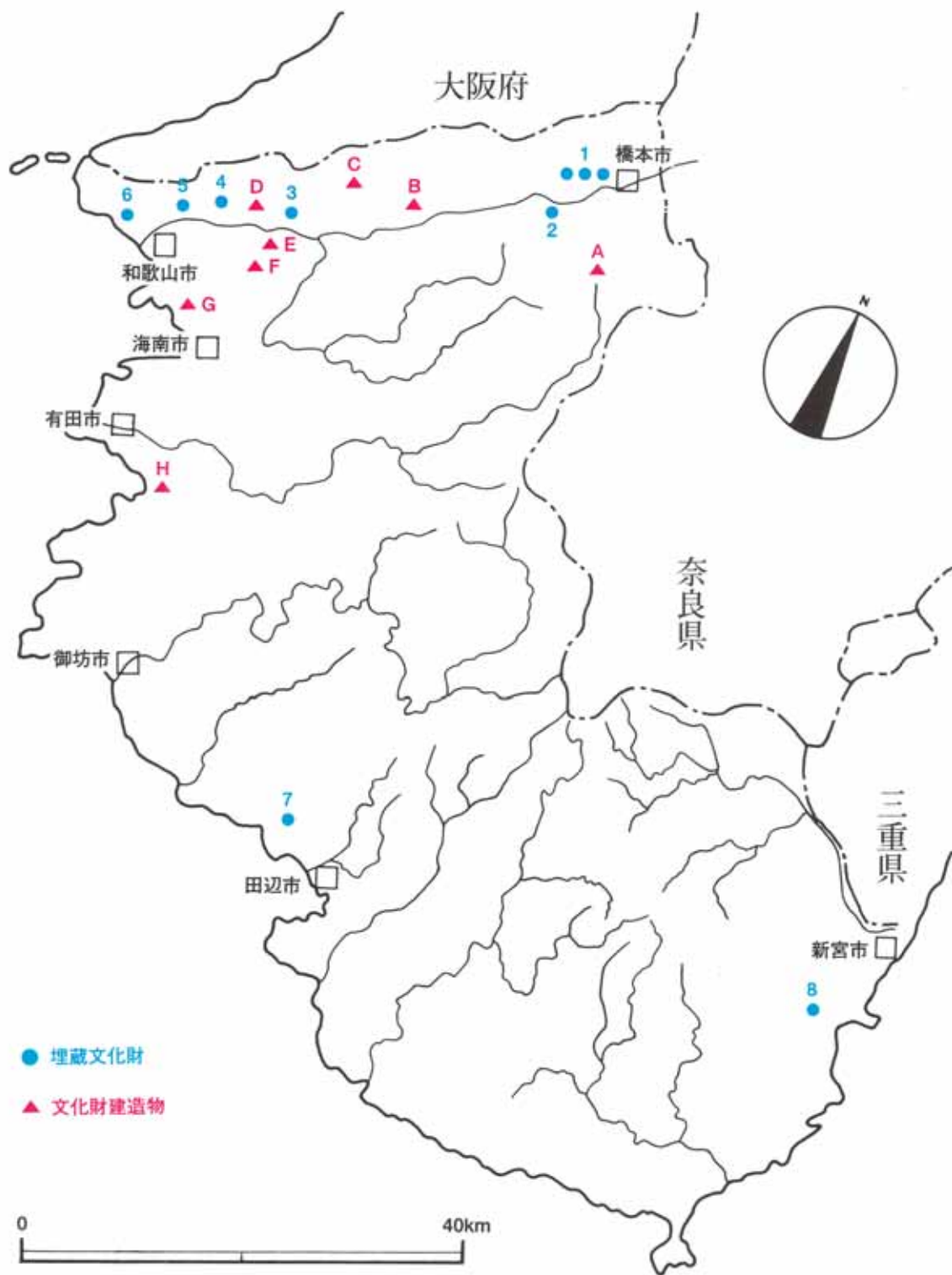
## 平成11年度 (財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

### 埋蔵文化財発掘調査事業

	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	京奈和自動車道(橋本道路)建設に伴う発掘調査(垂井女房が坪・野口・北馬場遺跡)	橋本市	11. 8.20~12.12.31	4,928㎡	近畿地方建設局 和歌山工事事務所
2	慈尊院弥勒堂防災施設設置事業に伴う史跡高野山町石他発掘調査	伊都郡 九度山町	11. 8. 7~12. 3.24	186㎡	宗教法人 慈尊院
3	県道粉河加太線改良工事に伴う山口遺跡第2・3次発掘調査	和歌山市	11. 3.19~11. 9.30 11. 8.10~11.12.17	935㎡	和歌山県 海草振興局建設部
4	県立養護学校建設に伴う弘西遺跡第2次発掘調査	和歌山市	11. 4. 1~11.11.19	2,030㎡	和歌山県 教育委員会
5	県道西脇山口線改良工事に伴う楠見遺跡第2次発掘調査	和歌山市	11. 9.27~12. 3.31	1,116㎡	和歌山県 海草振興局建設部
6	県道西脇山口線改良工事に伴う西庄遺跡第5次発掘調査	和歌山市	11. 7. 9~12. 5.31	1,600㎡	和歌山県 海草振興局建設部
7	近畿自動車道南部IC建設に伴う徳蔵地区遺跡第3次発掘調査	日高郡 南部町 南部川村	11. 4. 1~12. 3.31	12,711㎡	日本道路公団
8	那智勝浦道路建設に伴う藤倉城跡発掘調査	東牟婁郡 那智勝浦町	10. 7. 1~12. 3.20	12,429㎡	近畿地方建設局 紀南工事事務所

### 文化財建造物設計監理事業

	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	県指定文化財 金剛峯寺大主殿他保存修理事業設計監理	伊都郡 高野町	11. 4. 1~12. 3.31	7棟	財団法人 高野山文化財保存会
B	重要文化財 粉河寺大門保存修理事業設計監理	那賀郡 粉河町	11. 4. 1~12. 3.31	1棟	宗教法人 粉河寺
C	旧医王院本堂保存修理事業設計監理	那賀郡 打田町	11. 9.14~12. 3.31	1棟	打田町
D	県指定文化財 力侍神社本殿他保存修理事業設計監理	和歌山市	11. 4. 1~12. 3.31	2棟	宗教法人 力侍神社
E	重要文化財 田中筋家住宅主屋他保存修理事業設計監理	和歌山市	12. 2. 1~12. 3.31	6棟	和歌山市
F	重要文化財 旧谷山家住宅主屋保存修理事業設計監理	和歌山市	11.11.18~12. 3.31	1棟	和歌山県
G	重要文化財 東照宮本殿他保存修理事業設計監理	和歌山市	11. 4. 1~12. 3.31	7棟	宗教法人 東照宮
H	湯浅の伝統的町屋調査業務	有田郡 湯浅町	11. 6. 1~12. 3.31		湯浅町



受託事業所在地



## 垂井女房ヶ坪・北馬場遺跡の発掘調査

### 【垂井女房ヶ坪遺跡】

垂井女房ヶ坪遺跡は、紀の川の右岸、橋本市隅田町垂井に所在する。当地は、和泉山脈南麓から派生する尾根の谷間に位置しており、この谷のほぼ中央部を隅田川が南流して紀の川に注いでいる。調査区のすぐ西側の台地上には当地の荘鎮守である隅田八幡神社が鎮座しており、鎌倉時代以降は在地の豪族である隅田氏一族と関係の深い地域であったと考えられる。周辺の遺跡としては、北方約300mの地点に垂井榎塚遺跡が、さらにその北側の小高い丘陵地には隅田党の本城とも言われている岩倉城がある。また、東側の山の中腹には垂井古墳が所在している。

今回の調査においては、平安時代中頃から鎌倉時代初めにかけての建物跡と思われる柱穴や土坑が多数検出された。柱穴は径20～30cmほどで、深さ20cm前後を測る。柱穴の数は多く、かえって整然とした並びが確認し難い状況で具体的な建物を復元するには至らなかったが、柱穴の大きさから推して、規模的にはさほど大きなものではなく、2間×3間ほどの建物と考えている。鎌倉時代はじめの土坑からは瓦器・土師器の皿が多く出土している。



中世の柱穴群（南から）



中世の瓦器・土師器

今回の調査ではこれまで確認のできていなかった古代末から中世にかけての遺構を検出することができた。残念ながら調査範囲が限られており、存続時期や範囲さらにその性格などについては、明瞭にすることはできなかったが、当地付近には隅田八幡宮が所在するなど隅田党との関係が深い土地柄でもあり、両者との関係を考える上で、貴重な資料になるものとおもわれる。なお、前年度調査においても確認されていることであるが、調査区周辺には自然流路の跡とおもわれる砂礫層の堆積が随所に見出されている。古くから微高地上をえらんで小規模な集落が営まれていた可能性はあろうが、当地周辺が安定し、耕地化が進み集落へと発展するのは古代末以降のことと考えられよう。 (村田 弘)

## 【北馬場遺跡】

当遺跡は橋本川左岸の小高い丘陵地に位置し、標高は約111～115mを測る。またこの地は古来から大阪や京都から紀伊の国に入る重要交通路である紀見峠越えの入口にあたる。周辺の遺跡としては北に胡麻生館跡、西に小原田城跡などの中世の遺跡が隣接し、南には紀の川平野を一望できる陵山古墳がある。

検出遺構の時期については中世、古代、弥生時代、縄文時代のものを確認したが、そのほとんどが13～15世紀の中世のものであった。主な遺構としては掘立柱建物跡、土坑状遺構、溝状遺構などである。掘立柱建物跡の時期については、13～14世紀と考えられるものが大半で、この中には、柱穴の掘方が60～70cmを測る長方形の大きな建物跡や、掘方が直径30～40cmの円形の総柱の建物の2種類があった。円形の掘方の建物については出土遺物から確実に中世と判断できるが、大きな掘方の建物については、他の建物と軸を異にすることや、須恵器細片が出土することなどから中世と考えがたい。また、これと同様の掘方の建物跡と隣接した土坑状遺構から、奈良時代の遺物(土師器杯)が出土していることから、ほぼ同時期のものの可能性が強いと考えられる。

また溝状遺構、土坑状遺構もほぼ中世掘立柱建物と同時期で大差のないものと考えられる。その他には、調査区の南端で弥生時代中期の竪穴住居址を1棟検出した。直径約6mの不正円形で、遺存高は検出面から約20cmを測る。また調査区西寄りでは、縄文時代中期(船元式)の土器が出土した土坑状遺構を1基検出した。この遺構のプランおよび性格については不明である。

今回の調査では空白時期はあるものの縄文時代から室町時代までの遺構・遺物の確認をすることができた。この中でもとりわけ鎌倉時代の掘立柱建物跡、土坑などが多数検出され、ここに中世の時代村落が形成されていたことは間違いないと考えられる。

今後の調査課題としては、今回の調査で検出した数少ない縄文時代、弥生時代あるいは奈良時代の遺構の広がりを確認する必要があると考えられる。

(佐伯 和也)



東側調査地全景（西から）



西側調査地全景（東から）



## 慈尊院遺跡の発掘調査

慈尊院は和歌山県北部の紀の川上流南岸に所在し、現在は高野山真言宗の寺院である。慈尊院からは、高野山参詣の古道である町石道が通っており、平安時代には高野山が山麓に設けた政所として、什宝・穀蔵・事務等を管理する出先機関の役割を果たしていたとされる。

今回の調査は、防災施設設置に伴うもので境内地及び西側に隣接する阿闍梨寺跡の調査をおこなった。

境内地では、表土を除去すると整地土層が厚く堆積していた。中でも境内南側では40cmほどで確認できた地山が、北に行くにしたがって深くなり確認することが出来なかった。

阿闍梨寺跡においても同様に整地土が堆積しており、地形の傾斜からみて地山の確認しやすい調査区東半部であっても、表土から2m掘り下げたが地山を確認することができなかった。また、現在まであった阿闍梨寺の創建時期や、建替えに伴う遺構や遺物も確認できなかった。

以上の調査結果から、拝殿の南側軒先付近から北側に向かって、急激に下がっていく山の裾部であった地形のところに、北に向かって整地土を入れ平坦面を作り出すという大規模な造成がお



阿闍梨寺跡調査前（南東から）



『紀伊国名所図絵』慈尊院

こなわれていることがわかった。またこの造成方法として、約10cmの礫層を幾層にも重ねた上に黄色のシルト質の土を重ねた造成を2回以上繰り返しているのを確認した。造成の時期としては、整地土出土の遺物が少ないためはっきりとはわからないが、12～15世紀の遺物が少量であるが出土していることから、少なくとも造成時期は15世紀以降におこなわれたのではないかと考えられる。その年代はちょうど、天文9年（1540）に紀の川の洪水で被害を受け、現在の位置に慈尊院を移したとされるのにほぼ相応してくる。この造成が慈尊院移建による造成か、または洪水以前からの造成工事であったのかは現在のところ不明である。

（齋藤 有美）

## 山口遺跡の第2・3次発掘調査

山口遺跡は紀の川の右岸、和泉山脈南麓の緩斜面に位置し、古代から和泉国と紀伊国を繋ぐ交通の要衝となっている。調査地の標高は約20mを測り平坦地となっている。

第2・3次調査ともに県道粉河加太線の拡幅工事に先立ち、現有の道に並行に南側と北側を調査した。調査地の現況は水田および雑種地であった。

### 【第2次発掘調査】

検出遺構は中世と古代および古墳時代のものを確認した。

中世の遺構は鋤溝跡、次にその下層で溝状遺構を検出した。鋤溝跡の方向は現状の地形と合致し、中世から現代に至るまで水田として踏襲されてきたものと考えられる。また、検出した幾つかの溝状遺構はほぼ南北方向を呈し、いずれも幅約1mを測り、間隔は1m弱であった。これの性格についてはまったく不明であるが、考えられるとすれば耕作関連の遺構の可能性が強い。これら中世の遺構については出土遺物が少量かつ細片ではあるが、あえて時期決定をするならば、鋤溝遺構については15世紀、溝状遺構は13～14世紀のものと考えられる。

古代の遺構は平安時代の包含層の上面から検出した溝、土坑がある。また、この包含層下からは溝と自然流路を検出した。溝は検出面での幅約2m、底面の幅約25cm残存の深さ約1.6mで、断面形態は逆台形を呈する。土坑は検出し得た規模では2m×2m、埋土は灰褐色の非常に粘性の強いものである。包含層下検出の自然流路は幅6m、検出面からの深さは1mを測る。埋土は1～10cm大の礫層で、明らかに自然流路と考えられる。ここからは布目瓦片が少量出土している。また、これより南東で検出した幅1m弱の東西方向の溝からも布目瓦の破片が出土している。おそらく調査地北側の山口廃寺跡のものと考えられる。

古墳時代の遺構は、昨年度調査において検出済みの掘立柱建物群と関連すると思われる柱穴と溝の続きと考えられる遺構を検出した。

掘立柱建物については削平が著しく、残存の深さが2cm程度と非常に残りの悪いもので、柱列の並びも整然としない。しかし、柱穴の規模および埋土は昨年度検出したものと非常に酷似する。また溝についても同様のことがいえる。

昨年度と同様の柱穴を確認したことでさらに建物群の存在が確固たるものとなったといえよう。



調査地全景（西から）

### 【第3次発掘調査】

検出した遺構面は基本的に二面で、中世（鎌倉時代初頭～室町時代末）と古代（平安時代）の遺構面と考えられる。古代の面では一部古墳時代と思われる遺構も同時に検出した。県道北側調査区上面では、検出全長26m 幅1.2～2m、現状での深さ35cmの溝状の遺構があり、北側の肩には当板を施し、溝のほぼ中央部には石列を築いている。出土遺物から室町時代後半と考えられる。下面からは鎌倉時代中頃と考えられる柱穴群と、古代と考えられる掘方が1辺60cmの隅丸方形の掘立柱建物を検出した。正確な時期は出土土器が細片のみのためわからない。

県道南側調査区の上面からは室町時代後半と考えられる掘立柱建物、土坑、溝、自然流路を検出した。下面の遺構については溝、柱穴、土坑、自然流路遺構等を検出した。この面の遺構の時期は自然流路を除いては出土遺物等から古代の範疇であると考えられる。一辺約60cmを測る隅丸方形の柱穴を多数検出したが、並びが不明確で今後の検討を要する。また、調査区北端にいくにしたがって浅くなる幅約1.5m、残存の深さ約30～90cmの溝も検出した。

今回の発掘調査を総合的にみて、山口遺跡では中世（鎌倉時代中頃から室町時代後半）の時期は、検出した掘立柱群から、生活域として機能していたことが十分に窺え知れる。

また、古代の建物の性格としては近隣の山口廃寺跡や、他国から紀伊国に入る幹線と接していることなどから、これらとの関連性の強い遺構であると考えられる。 (佐伯 和也)



調査区南側上面遺構全景（西から）



調査区南側下面遺構全景（西から）

## 弘西遺跡の第2次発掘調査

弘西遺跡は、和歌山市弘西に所在する弥生時代を中心とした遺跡である。遺跡は、和泉山脈南麓と紀の川北岸の間の、山脈から派生した中位段丘上に立地している。同周辺の紀の川北岸下流域は、県下でも有数の遺跡密集域であり、弥生時代から古墳時代の遺跡が多数存在する。中でも弥生時代の高地性集落として著名な橘谷遺跡は、弘西遺跡のすぐ北側に位置している。

弘西遺跡は、昨年度の1次調査の結果、弥生時代後期中葉の自然流路と、それを挟むように竪穴住居跡2棟及び焼土土坑、中世の溝2条が検出されている。

今回の2次調査は、1次調査が行なわれた丘陵上よりも3 m程低く、緩やかな谷を覆うかたちとなり、調査面積は1,900㎡に及ぶ。検出した遺構としては、古代・中世と考えられる自然流路SR1と、弥生時代の自然流路SR2・SR3がある。いずれも自然に形成されたものと考えられ、堆積も厚い。SR1は調査区を斜めに蛇行し、7世紀の須恵器坏身と中世の瓦器椀が出土しているが、いずれも小片で流れ込んだものと考えられる。SR2・SR3はそれぞれ調査区の西端・東端にひっかかるかたちで検出し、弥生時代後期前半に比定できる多くの土器を含む。また旧石器時代後期の国府型ナイフや、縄文時代草創期の尖頭器も出土している。

和歌山における弥生時代集落は、当初に沖積微高地や丘陵裾部に存在したあと、中期末にいったん途絶える。そして後期になると集落立地を中・高位段丘に変え増加していく。今回の弘西遺跡2次調査は、その歴史環境的背景、あるいは高地性集落として著名な橘谷遺跡との位置的諸関連など、様々な問題を解く一資料となり得よう。

(立岡 和人)





## 楠見遺跡の第2次発掘調査

楠見遺跡は、紀の川の河口から5 kmほど遡った右岸に位置する。地形的には、和泉山脈から張り出した背見山山塊の谷筋から押し流されてきた土砂により形成された狭い扇状地にある。楠見遺跡は、1969（昭和44）年に和歌山市立楠見小学校中庭の調査において、国内最古級の陶質土器が多量に出土したことで全国的に著名な遺跡である。また、弥生時代初期の土器の出土でも知られている。北側の丘陵には、かつて、10基程度古墳で構成された晒山古墳群が存在した。その内、現在もその威容を放っている県内最大級の大谷古墳や晒山6・7号墳が残っている。

調査地は3箇所に分かれ、昨年度に引き続き、楠見小学校の西側地区をC区、北側地区をD区、東側地区をG2区と呼称して調査を行なっている。各調査区の遺構面は、C区では大別して7面まで、D区では4面まで、G2区では5面まで確認できた。

C区は、掘削土を搬出入する関係で、東西2地区に分割（C1区・C2区）して調査を行なった。その内、第7～4遺構面は、調査区の南側半分のみを掘削して作業を進め、主に縄文時代晩期の自然流路数条、土坑数基が検出された。第7遺構面の自然流路は、まとまった量の縄文土器が認められたが、遺存状況が極めて悪く、良好な状態で取り上げることができなかった。

第3・2遺構面では、遺構の重複関係が著しく、各遺構の所属時期を明確にし得ていないが、弥生時代前期、古墳時代中期から室町時代前期の遺構・遺物が多量に検出されている。主だった検出遺構として、弥生時代前期の溝2条、古墳時代中期の自然流路1条・竪穴住居跡状の遺構・落ち込み・土

坑、平安時代後期の掘立柱建物跡1棟・木組み井戸・柱抜き取り後に遺物を埋置した柱穴、鎌倉時代後期の曲物を利用した水溜め2基などがある。



C2区 第3遺構面全景（白線の内側が古墳時代の遺構、右奥が楠見小学校）（西から）

D区は、1969年の調査地に約25mと最も近いことから、古墳時代中期の遺構・遺物が多量に検出されるものと予測されていたが、調査区の西端で古墳時代中期の自然流路1条・土坑1基・柱穴状の小穴数基が見つかる程度である。出土した遺物が非常に少なく、土器の中に室町時代のものが少し混じることから再検討が必要である。他地区と異なる点は、鎌倉時代の遺物包含層が存在しないことである。



G 2 東区 第 3 遺構面全景（西から）

調査地が狭く、湧水が著しいため、第8b層以下の黄褐色粘質シルト層の掘削は断念した。G区も、C区同様、東西2地区に分割（G 2 東区・G 2 西区）して調査を行なった。今回の調査の中で最も東の地区で、地表から約3.6m掘り下げてでもまだ平安時代後期の遺物が出土した。さらに下の堆積土にも遺物の存在する可能性があったが、それ以上掘ると危険なので調査を断念した。

掘り下げていく途中で、谷筋から押し流されてきた土砂に埋まった鎌倉時代後期の曲物を利用した水溜めや各遺構面に自然流路や溝跡が多く見つかる。このことから、この調査地区周辺は当時の屋敷地から少し離れた“村の外れ”であったことを窺わせる。

出土遺物の大半は、遺物包含層から出土した鎌倉時代の土器類、遺構堆積土から出土した平安時代後期の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。また、昨年度確認された黄褐色粘質シルト層の下部と同層の自然流路から、縄文時代晩期の土器・石器がまとめて出土している。その他、6世紀前葉の円筒埴輪の出土は、初見であり、今後、晒山古墳群との関係を考える上で注目される。

以上のことから、楠見小学校の西隣の地区では、1969年の調査地と関係すると考えられる古墳時代の自然流路などがあり、同じような陶質土器も出土しており両地区の関係を考える上で注目される。しかし、遺物量の違いは歴然としており、1969年の調査地点が特別な在り方を示すことを補強したものと考えられる。

また、昨年度の調査で検出されなかった平安時代後期の遺構・遺物の検出によって、平安時代後期から室町時代にかけての集落の東側の状況が判明してきた。平安時代後期から室町時代前期にかけての屋敷地に関する遺構の存在は、集落の消長や室町時代後期以後の水田化の様相を考える上で欠かすことのできない資料である。

（土井 孝之）

## 西庄遺跡の第5次発掘調査

西庄遺跡は和歌山市北西部の西庄・本脇地内の砂堆に位置する海浜集落である。県道西脇・山口線道路拡張工事に伴う事前調査で、平成7年度に試掘調査を、平成8年度から発掘調査を実施している。これまでの調査で、古墳時代の竪穴住居や製塩炉・古墳、中世墓等が確認されている。本年度は第5次として約1,600㎡を調査した。

**調査成果** 古墳時代の竪穴住居3棟、石敷製塩炉2基、古墳4基、中世墓3基を検出した。古墳は第3次調査で1基の周溝が確認されており、今回検出した古墳を西から西庄2～5号墳とした。

2号墳は直径約14mの円墳で、横穴式石室を内部施設としている。攪乱により玄室床面の一部しか遺存しておらず、規模は不明である。玄室床面は2面あり、上面は数cm大の玉石を敷き詰めていた。下面は20～40cm大の扁平な堆積岩の板石を水平に敷いていた。玄室主軸に直交する幅約10cm・長さ約1.2mの結晶片岩の仕切石が設けられていた。須恵器の短頸壺、土師器の椀、刀子片やガラス製の小玉・丸玉、碧玉製管玉が出土した。

3号墳は直径約6.6mの円墳で、竪穴式石室を内部施設とする。石室の規模は幅約0.7m・長さ約1.7mを測る。側壁は30～60cm程の和泉砂岩を小口積みにしており、床面には20cm前後の扁平な和泉砂岩を敷いている。20歳代の女性人骨が再葬されていた。須恵器の杯蓋・平瓶、刀子が出土した。

4号墳は直径約12.7mの円墳で、南に開口する横穴式石室を内部施設としている。攪乱により石室の上半部は破壊されていた。玄室幅約1.65m長さ約2.1m・羨道長約3.0mを測る。石室の構造は岩橋千塚古墳群の横穴式石室に類似しており、玄門部は袖石が内部に突出し、その下には玄室前道基石を備えている。奥壁から約1/3の位置に結晶片



2号墳



3号墳



4号墳

岩の仕切石が設けられている。石材は和泉砂岩を主としており、側壁隙間の充填材や玄門部前壁の化粧石などには結晶片岩が使用されている。玄室床面は3面確認でき、第1次床面は6世紀後半で、第2次床面は7世紀前半で、第3次床面は7世紀中頃である。第1次床面には偏平な堆積岩の板石が敷かれており、第2次床面と第3次床面には数cm大の玉石が敷かれていた。玄室内からは頭蓋骨の数で算出すると20体以上の人骨が確認された。1基の横穴式石室に葬られた人数としては県内はもとより、全国でも最多ではないかと思われる。ただし、頭蓋骨や大腿骨などは遺存していたが、手足の指の骨など小さい部位の骨がほとんど検出されなかったことから、3号墳と同様、再葬によって石室内に納骨された可能性が高い。副葬品として、須恵器の広口壺・台付長頸壺・提瓶・杯身・杯蓋、土師器の杯・壺、ガラス製の小玉・丸玉、水晶製の切子玉、碧玉製の管玉、滑石製の白玉、鉄鏃、刀子等が出土した。



5号墳

5号墳は石室が削平されており、周溝のみを確認した。径約6.4mの円墳だと推定される。周溝から須恵器の杯身・甕が出土した。

竪穴住居は1辺4～5m程度の隅丸方形でカマドを備えたものもある。

製塩炉は10～20cm大の偏平な和泉砂岩を敷いており、一部の石は熱を受けて赤変している。

中世墓は方形の土坑墓で、3基とも屈葬された人骨が遺存していた。瓦器碗や皿、土師器の皿が副葬されていた。13～14世紀の墓である。

**まとめ** 今回の調査で古墳が発見され、西庄遺跡の古墳時代の集落の様相がほぼ明らかになりつつある。石室の構築技法が岩橋千塚古墳群の石室を踏襲しており、両集団の密接な関係が窺える。また、再葬という特殊な墓制が行われていたことも、集団の性格を考察するうえで注目に値する。

(黒石 哲夫)



石敷製塩炉



中世墓

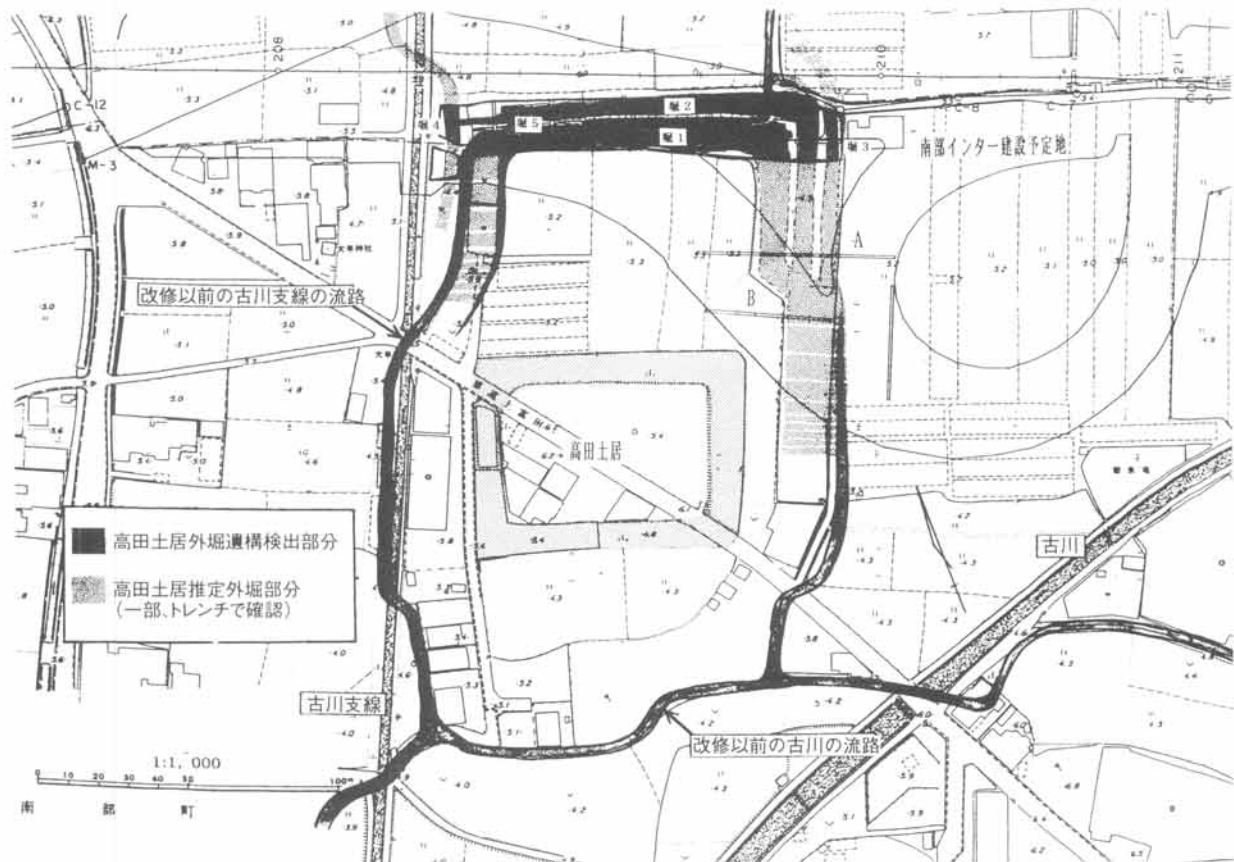


## 徳蔵地区遺跡の第3次発掘調査

紀南地方に位置する南部郷は、近年まで土地改変をする大規模な開発がなかったため、古来からの景観が濃厚に現代まで残る地域である。農耕社会から生み出され、「聞く銅鐸」から発展した祭祀具「見る銅鐸」は、南部郷から6個も出土している。また、170ヘクタールとも言われる条里型水田（109m四方）が良好に残る八丁田圃や高野山に残る200点余りの平安時代から室町時代にかけての当地の様子が記された文書、本荘・新荘・吉田など地域の開発過程を示す地名、実在した鎌倉時代の地頭代官の名を刻んだ石造物など、全国の中世史研究者の間では、「標本的な中世の面影を残す荘園」として有名である。

古くからの景観が残るこの南部郷に大規模な発掘調査が実施され、各時代の様相が明確になり、従来からの歴史観に変換を迫る考古資料が蓄積されつつある。

南部インターチェンジに伴う発掘調査は、4年間の計画で平成9年度より実施しており、大きくは3点、縄文時代晩期から弥生時代前期の様相・八丁田圃の形成過程・平城である高田土居（城）の内容等、明確化しつつある。縄文時代晩期～弥生時代前期にかけては、旧河川や微高地を検出した。微高地からは晩期の竪穴住居跡を検出した。また低湿地の拡がりがあるため、水田



高田土居（城）平面図

跡が存在する可能性は高い。微高地には、古墳時代初頭の溝やまた隅丸方形の堅穴住居跡なども存在する。昨年度の調査により鎌倉時代以前に水田形成がなされ、室町時代に大きく改変されたことが明らかとなった八丁田圃の調査は、最も南の端、鎌倉時代水田跡の最南端がどこかを明確にした。高田土居（城）は、古川・古川支線に挟まれた地点に位置し、条里制地割の最南端部より外側、八丁田圃から流れ出る水が一点に集まる箇所に存在する。従来、館形式の単郭の平城（南北43m・東西54m・堀の幅10m）と認識されてきたが、本年度の調査により、外側、北辺・東辺・西辺部に大規模な二重・三重の堀を確認し、複郭の平城であることが判った。堀の規模は、北辺内側は、幅10m・深さ2.2m・長さ106m、外側は幅8m・深さ1.2m・長さ120mで西側よりで幅が3mと狭くなっている。しかもその手前で両側の堀を繋ぐ溝が作られている。北辺部の外側の堀は、断面形状や条里制の水田から考えて、用水路を兼ねているものと考えられる。高田土居（城）はこれらの堀の検出により、東西160m・南北220mの規模をもつ全国屈指の平地居館（平城）である事が確認できた。北辺部の二重の堀は、堆積した層・出土遺物の検討により、5期に分けて考えることができる。1期は、まず最初に内側の堀が掘削され、その両側に掘削した土による土塁が作られ、使用された段階、2期は、両側に盛られた土塁が破壊され、その土が堀内に堆積し、その再掘削と外側の堀の掘削した段階で、この期に北辺部は二重堀の状況を呈する。内側の堀の建築用廃材や原木による護岸施設の構築もなされている。3期は二重の堀が使用され、流れていた段階、4期は水が滞留した状況で使用されていた段階、5期は二重の堀を埋め立て水田化した段階である。

1期が15世紀代、3期は15世紀後半代、4期は16世紀前半～後半代にかけて、5期が16世紀末～17世紀代にかけてである。中世南部荘の平地に存在した高田土居（城）は、その立地・全国屈指の規模・堀の機能（防御用及び用排水路との兼用）や水量調整施設にみる土木技術の高さ、護岸施設の存在など、城郭史の基本資料である。

（渋谷 高秀）



東から見た堀1・2



堀1の護岸用木材列（西から）

## 藤倉城跡（川関遺跡）の発掘調査

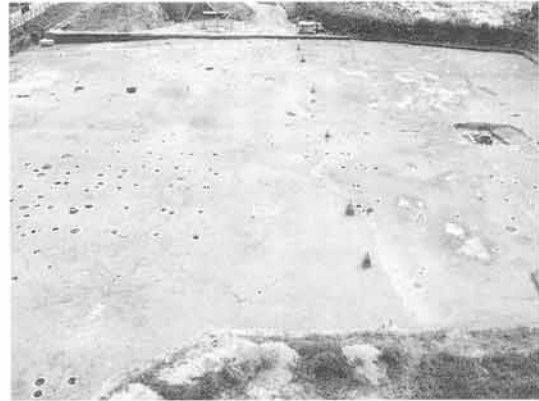
**調査経緯** 調査地点は、那智勝浦町川関の標高約4m前後の水田地帯である。那智山への入り口という交通の要衝地にあたり那智川の右岸に比較的広い平地が開けており、集落の立地には格好の場所である。平成10年度に那智勝浦道路建設に先立ち実施した藤倉城跡試掘調査の際に、前面の水田部の2ヶ所から柱跡や溝が発見され平安時代から鎌倉時代の土器類が出土したことから、これまで未確認であった遺跡が存在することが明らかになった。このため、平成11年8月から平成12年3月にかけて5,443㎡を調査した。

**調査成果** 検出した主な遺構は、平安時代から室町時代にかけての掘立柱建物7棟、井戸2基、溜枳1基、溝、鑄造土坑、土坑、柱穴などである。

建物は方位と出土遺物から13世紀前半頃に建てられた2棟と、それが廃絶した後に建てられた4棟に分類できる。総柱建物で床面積が90㎡前後のやや大規模な建物が3棟ある。これらの建物は調査区の東側に隣接する現在の道路とほぼ同様の方位であり、この道路が当時の道路を踏襲したものである可能性が高い。道路側溝だと考えられる溝も確認した。

井戸の1つは平面が円形で、検出面で直径約2.6m・深さ1.9mを計る。底部には広葉樹の直径約1.0mの大木を刎り抜いた井筒が据えられている。その外側には、四隅に柱状の部材を立て、横板と縦板を方形に組んでいる。井筒内から直径約20cmの曲物が出土した。蔓草で巻かれ、内外面にはかすかに朱漆の痕跡がみられる。釣瓶として使用していた可能性がある。白磁や青磁、山茶碗が出土し、平安時代末期頃に廃絶している。

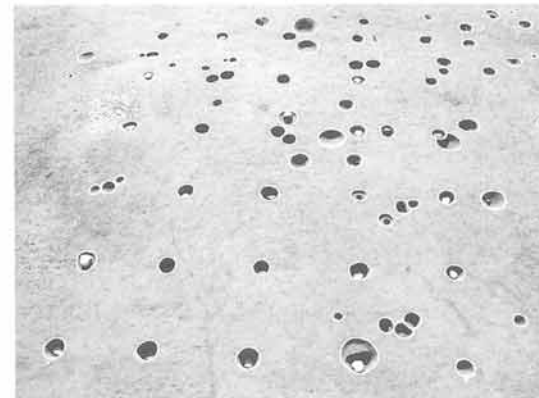
溜枳は、5.7m×4.4mの長方形の掘方で、20cm～60cm大の石材を一辺約1.8mの隅丸正方形に積んでいる。石積みの底部には径約20cmの胴木が四



北半部全景（北西から）



南半部全景（北東から）



掘立柱建物跡（北西から）

辺に据えられている。深さは約1.8mで、底部では直径約30cmの木材を方形に刳り抜いた部材が出土した。導水管の駒の継手かもしれない。石鍋や土師器が少量出土した。室町時代の初期に廃絶したようである。

鑄造土坑は約2.5m×1.2mの長楕円形で深さ約10cmを計る。土坑内には厚さ3、4cmの鑄型の破片が散乱していた。細片が多く、何を鑄造していたかは不明である。山茶碗が出土しており鎌倉時代前期の遺構だと考えられる。

北東部では総柱建物を弧状に囲む噴砂を数条検出した。建物の現存時に地震が発生して、上下への振動で噴砂が吹き上がった可能性がある。

出土した遺物は、東海地方から搬入された山茶碗が多く、常滑焼の壺や須恵質の摺鉢や土師器の皿・土釜、滑石製の石鍋、土錘、硯などもみられる。また、中国製の青磁や白磁も多数出土し、青白磁の合子や梅瓶の貴重品も出土した。また、「乗禪」・「十」・「いぬみや」・「たき」・カラスのようなものを墨書した土器もみられる。

まとめ 今回の調査では、鎌倉時代を中心とした、集落跡を確認した。当時は那智大社への参詣が盛んであり、遺物の中に一般の集落ではあまりみられない多数の青磁や白磁、合子や梅瓶が出土していることから、那智大社と何らかの関連をもった集落ではないかと推定される。実方院米良氏は十方院とも書き、「十」と墨書した土器が数点みられ、それが米良氏の印であることから、平安時代から鎌倉時代にすでに当地が米良氏の支配下にあった可能性も生じてきた。米良氏は平安時代に藤原氏の一族から分派したといわれており、「藤倉」という字名もそこから起因したものかもしれない。

噴砂が検出され、噴出した砂の中には数cm大の礫も含まれることから南海大地震の液状化現象によるものだと推定される。 (黒石 哲夫)



井戸跡



溜樹跡



地震跡 (噴砂)



## 重要文化財 粉河寺大門保存修理の設計監理

粉河寺大門の保存修理事業は平成10年10月から42ヶ月の計画で開始され、2年度目に当たる本年度は、瓦から一階の柱まで全ての部材の解体を行い、続けて狭間石の据え直しや土間叩きなどの基礎工事、木部の繕いなどを実施した。

大門は江戸時代中期の宝永4年（1707）に建立されたものであるが、その後の修理の経過を解体時の調査により解明した。まず、屋根瓦が当初から平成に至るまで何種類も存在することより、瓦の差し替えなどの維持修理は頻繁に行われていたようである。年代を特定することは難しいが、後補の鬼瓦には天明6年（1786）の箋書きがあり、この頃比較的大きな屋根修理が行われたことが分かる。近年では、昭和53年に背面と東面の過半が葺き替えられている。

軒廻りを見ると、南西化粧隅木は中古に継木されている。これは屋根荷重に起因する軒の垂下により隅木が破損したためと考えられ、江戸期、おそらくは天明頃の修理であろう。また昭和53年には、背面側化粧隅木の上端に大きく矧木して成を増し、大材の桔木を隅へ挿入するなど、大掛かりな補強工事を実施している。何れも軒廻りの垂下を補正する目的で行われた修理であり、過大な屋根荷重をどう支えるかに腐心した様子が窺える。

軒より下は、二階の扉廻りや一階の金剛柵に後世の手が加えられている他は目立った改造もなく、当初の形式を良く伝えていた。各部材は良質の梅や樺が使われ、その保存状態は概ね良好であった。ただ、一階柱の底部は、湿気による腐朽や虫害が予想以上に進んでおり、ほとんどの柱で繕いを要するほどであった。

今回の修理では、軒先の垂下の原因となる屋根荷重の軽減を図るため、瓦の大部分を葺土を用いない「空葺き」とし、小屋内部にも金具による補強を施す方針で準備を進めている。また剝落の著しかった弁柄塗を全面的に塗り直し、当初の色彩に復する予定である。 （川戸 章寛）



(左) 解体状況 (右上) 土間叩き (右下) 一階柱底部の腐朽状態

## 重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理の設計監理

和歌山市祢宜に所在する旧中筋家住宅は、徳川頼宣の入府以来、地土格の処遇をうけ、和佐組の大庄屋を務めた中筋家によって、江戸時代末期に建てられた。戦後楯本家の所有となり現在に至っている。大きな敷地の中央東寄りに、大広間を備えた主屋があり、大広間の西側には内蔵が建つ。周囲は南側に表門、西側に長屋蔵、北蔵を配し、そのほかを土塀で囲み、北側には御成門を設けている。このほか未指定の人力車庫、味噌部屋、便所・風呂、茶室が建つ。

これらの建物は建築以来すでに百数十年経過しており、近年、屋根瓦のズレや割れが目立つようになり、雨漏りによって天井・床組が大きく腐朽し、小屋組・軸部にも腐朽が及んでいる。長屋蔵など倒壊寸前のものもあり、このままでは文化財の保存上、見過ごせない状態となったため、管理団体の和歌山市の事業として修理されることとなった。

修理は、表門・長屋蔵・御成門を解体、主屋・北蔵・内蔵・土塀を半解体修理とし、平成12年2月から平成20年3月の98ヶ月の事業期間で行われることとなった。人力車庫をはじめとする未指定の建物の修理、敷地周辺の整備は、修理後の公開・活用のための整備事業の一環として市単費行われる。平成11年度は、修理の初年度にあたり、破損の特に大きい長屋蔵の素屋根の建設を行った。カズラに覆われ倒壊寸前の長屋蔵のカズラを刈り込み、素屋根を架け始めると近所の人々の関心も高まってきた。12年度から主屋・表門の素屋根を架け、いよいよ本格的な解体工事が始まる。

(寺本 就一)



1. 旧中筋家住宅遠景



2. 長屋蔵 修理前の状況



3. 同前 (カズラ刈り込み後)



4. 長屋蔵 素屋根建設完了

## 重要文化財 和歌浦東照宮保存修理の設計監理

東照宮は、徳川家康を祀るため、元和7年（1621）に創建された。景勝地和歌浦の高台に海を望んで建ち、権現造りの社殿を中心に、唐門、楼門などが残る。修理工事は国指定建造物7棟すべてを対象に、平成9年度より平成12年度までの継続事業として実施している。今年度は昨年引き続き楼門の塗装工事をおこなったほか、これに加えて、本殿・石の間・拝殿と、唐門・東西瑞垣の塗装工事を実施した。

楼門塗装工事は、全面的な塗り直しを基本方針とした。今回工事では、昭和45年度工事で復原的に塗られた彩色の仕様を踏襲したが、丹塗りであっても彩色痕跡がある個所や、一部で配色のバランスを欠く個所があった。このため、施工にあたっては、監督、絵師と協議を重ね、配色や縋げんの仕様を変更した。唯一、昭和45年工事で彩色されずに隨身間板壁に残っていた松の絵は、これを保存することとし、新調パネルに複製画を描き、旧来の板壁前面に建て込んだ。

唐門・東西瑞垣塗装工事は、全面塗り替えを基本方針とした。延べ45間に及ぶ瑞垣の漆工事が主体で、さらに唐門の彩色工事が加わる。漆工事は本直しを基本とし、状態の良いところは上塗り直しに止めた。唐門の彩色は、漆下地よりやり直したが、2面ある天井画絵彩色は、真正性を重視した観点から、1面のみは剥落止めを施し、後世に残すこととした。

本殿・石の間・拝殿塗装工事は、剥落が進む彩色は補筆・剥落止め、漆は拭き漆を中心とした、現状維持修理の基本方針をとった。この点は先の二つの工事とは大きく異なる。現在の塗装は大正7年の塗装のほか、一部に江戸期の塗装も比較的状態良く残っている。今回はこれらを保存することを一番の目的においたためである。全面塗り替えではないために、竣工後の姿は若干精彩を欠くことは否めない。しかし漆を塗り替えると、古塗装を叩き落とすため、木部へのダメージがどうしても出る。古い塗装が残りにくい塗装修理にあって、これを残そうとする場合、今回のような現状維持修理は、保存方策として現在唯一のものであるとともに、結果として木部表面の保護にもつながることとなる。

（御船 達雄）



古塗装を叩き落した瑞垣



古塗装を剥落止めた石の間

## 湯浅町伝統的町屋調査業務

有田郡湯浅町湯浅において、伝統的建造物群保存対策調査が開始された。平成11年度より2ヶ年度の計画である。この調査は、歴史的な景観を残している地区を「伝統的建造物群保存地区」に決定し、より良く保存していくための基礎調査である。既に全国120箇所ほどで実施されているが、和歌山県内では今回の湯浅が初の調査となる。湯浅の歴史的町並みの特徴を明らかにし、その保存・整備事業を策定するための基礎的資料を提示することを目的としている。

調査は、大阪市立大学、和歌山大学、和歌山信愛女子短期大学、文化財センター等が湯浅町教育委員会より委託を受け、合同で実施する形をとっている。調査の内容は、町並みの歴史的形成過程から、将来に向けた保存事業に関することまで多岐に渡るが、センターとしては、湯浅に現存する伝統的建造物（主として町屋）の調査を担当することになった。伝統的な町屋の外観、平面、構造、細部意匠などを調べ、分類・整理し、その特徴を抽出することが主な課題となる。センターが本年度に行った調査の概要は以下の通りである。

7～8月 外観調査：伝統的町屋の分布とその残存状況を調べ、各戸のおおよその建立時代を推定し、町並みの全体像把握に努めた。そして主要な町屋148棟を選択し、個別調査カード（構造形式の記入、外観写真の撮影）を作成し、以後の調査の基礎データとした。

9月中旬 内部予備調査：上記調査カードを基に、年代の古そうなもの、当初形式をよく残しているものを選び、内部を見せていただいて、本調査の候補を絞り込んだ。

9月下旬～11月 本調査：特に重要と思われる町屋建築17棟について、本格的な調査を他のチームと合同で実施した。平面・立面・断面の実測の他、聞き取りおよび古文書類の調査も並行して行った。

今後、町屋の調査棟数を増やすとともに、報告書作成に向けたまとめの作業に取りかかる予定である。

(川戸 章寛)



江戸期の町屋：湯浅で最も古いと思われる。



明治初期の町屋：当初の形式をよく残している。

## 徳蔵地区遺跡出土の石棒について

縄文時代の石製品の一つである石棒は、東日本を中心に多く出土しており、和歌山県内では、これまでに10数点が確認されている。

石棒を縄文人が、どのように用いたのかは定かではないが、実用的なものとしてではなく、その形状が男根状を呈していること等から祭祀的なものとして使用していたと考えられている。

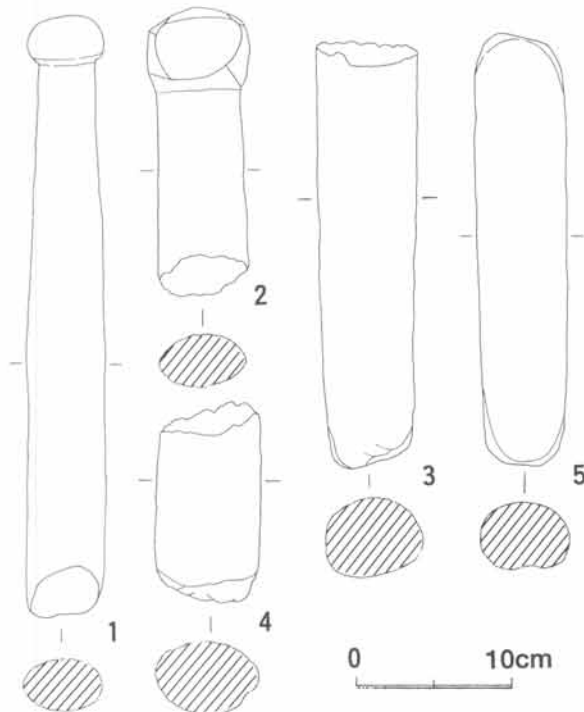
徳蔵地区遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての石棒が、自然流路・溝・土坑・包含層から、平成11年度に3点、平成12年度に2点と、合計5点出土している。

1は、現存長39.5cm、胴部の最大幅は5cmで、断面は扁平である。一方の端部には頭を作り、もう一方の端部は一部欠損しているものの、ほぼ完形に近いもので緑泥片岩を磨いて仕上げた丁寧な作りのものである。

2は、現存長19cm、胴部最大幅6cm、断面は扁平で頭を持つが、もう一方の端部は折れているため形状は不明である。結晶片岩を用い、研磨せず全面に敲打痕が残っている。

3は現存長27.5cm、最大幅7cmで断面は楕円形を呈している。端部の一方を欠損しているため、頭の有無等全体の形状は不明である。

4は、現存長13cm、最大幅7cmで、断面はやや扁平な楕円形を呈する。途中で折れているために頭の有無等の形状は不明である。残存している端部には自然面を残し、胴部側面は磨きを施してはいない。土坑の中から弥生時代前期中頃の土器に共伴して出土している。



徳蔵地区遺跡出土の石棒

5は、ほぼ完形で出土し全長28.5cm、最大幅6cmで、ややつぶれた楕円形を呈する。但し両端とも頭を作り出してはいないため、石棒の範疇に含めていいものなのか疑問も残る。

以上5点のうち、頭を作り明確に石棒といえるのは2点のみになる。しかしながら、他の3点に関してもその石材は紀北地方に産出するもので、徳蔵地区遺跡の所在する周辺地域には無いものである。そのためこれらが、南部平野から出土するということは、石材もしくは製品として、何らかの目的で人為的にこの地にもたらされたことは間違いのないであろう。(三浦 基行)



## 徳蔵地区遺跡出土の縄文時代晩期～弥生時代前期資料

瀬戸式と呼ばれる突帯が平坦な紀南地方の在り土器は、資料不足により、その成立・内容・終焉などが不明確であった。しかし、当遺跡の旧河川が埋没する過程で形成された単一の包含層よりコンテナにして20箱程度の縄文晩期土器・弥生土器・石器が共伴して出土した。各地から搬入された縄文土器は、氷I式古段階（近畿地方の最古の遠賀川式土器・東北地方の大洞A式後半）に編年される東日本の浮線文土器鉢(3)、東海地方の下り松に該当する深鉢(4)、長原式土器の壺(1)、刻み目が紀南地方に比較して細かい紀北地方の深鉢などがある。在り土器は、大きく断面の形状から三角形と平坦なものに二分類でき、それぞれ胎土が異なる。前者が瀬戸式と呼ばれる在りの突帯文土器であり、深鉢・壺・鉢(2・5)がある。二条が一般的であるが、あまり類例を見ない四条(2)のものもある。この二群の土器群は、同時期なのか、地域差なのかなど検討を要する。弥生土器は、壺・甕が出土した。結晶片岩を含む弥生土器壺は、接合時の段を生かす削出突帯以前のもので、近畿地方では最古に位置づけられる若江北遺跡よりも少し新しい中段階の資料と考えられる。甕は肩部に二条の沈線を巡らす。石器は、石棒・凹石である。近接する御坊市堅田遺跡において、当該期の土器群が出土しており、紀南地方において、弥生時代の始まりを考察できる資料が蓄積されつつある。(土器の時期に関しては、1月に行なわれた九阪研究会等で教示を得た。)

(渋谷 高秀)

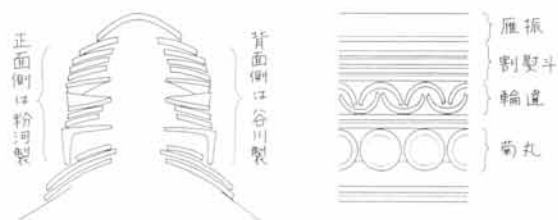


縄文時代晩期の土器

## 粉河寺大門の屋根瓦について

現在解体修理中の粉河寺大門は、宝永4年（1707）に建立されたことが鬼瓦銘により知られている。その鬼瓦はもちろん、屋根に葺かれたすべての瓦について解体時に調査を行ったところ、興味深い事柄が判明した。すなわち、建立当初より2種の瓦が存在し、それらが屋根を二分するよう葺き分けられていたのである。2種の当初瓦のうち、一方は地元粉河製の瓦、もう一方は泉州谷川製の瓦であった。

当初の粉河製、谷川製の瓦は、篋書きや刻印あるいは製作技法の特色より容易に識別できる。これら当初瓦の解体前の使用位置を見ると、正面と東側面が粉河で、背面と西側面が谷川の瓦で葺かれているようであった。建立以来、手の加えられた形跡のない大棟や両妻の掛瓦は、そのような葺き分けの形が明瞭で、単なる偶然でないことは明らかであった。特



大棟の状況



に大棟は、東の鬼瓦が粉河製で西が谷川製であるばかりでなく、棟積に使用される菊丸、輪違、割熨斗も、正・背面でそれぞれ使い分けられていた。こうしたことより、厳密に屋根を2分して葺き分けられたと判断されたのである。

解体調査後、「大門瓦勘定帳」と題された文書のコピーが寺より見い出された。宝永4年の年紀があり、大門建立当初の瓦の購入記録とみられる。記載事項は、まず「粉河瓦屋五郎兵衛」について、瓦の種類毎に員数と価格が列記され、続けて「泉州谷川瓦屋加兵衛」について同様の内容が記されている。まとめると表のようになる。

「鬼」「角巴」「角唐草」の員数は粉河と谷川で等しく、「丸」「平」「巴」「唐草」などの主要な瓦についても、それぞれほぼ同数と言える。単価を計算してみると全て両者で等しく、また合計金額はほぼ同額である。2業者から半々に瓦を納入したと考えてよいであろう。ただし「輪違」や「きく」などは員数が大きく相違するなど、なお検討を要する点もある。

ここで、2種の当初瓦を比較してみると、次のようになる。

- ・計画寸法は両者同じと思われ、仕上がり寸法の精度においても同等である。
- ・厚みは粉河の方が厚く実測され、従って重量も1割ほど重い。谷川の瓦は木口は厚く作るが中程は薄くするなど軽量化の試みが見て取れる。
- ・軒先瓦の瓦当部分では、粉河が雲母粉を用いるのに対し、谷川は離れ砂とする。

・総じて粉河は仕上げが丁寧であり、手間を掛けた作りである。

粉河製の瓦がどっしり重く、美しい仕上げを心掛けたのに対し、谷川製の瓦は薄くて軽く、規格性の高い商品を目指したものと言えよう。

ところで谷川というのは、大阪府南部、和歌山県に接する泉南郡岬町にあり、戦前までは全国的に知られた瓦の生産地であった。谷川製の瓦については、近世中期以降、次第に勢力を拡大していったことが、各地に残る瓦や古文書などの記録により明らかにされている。例えば、幕府の御用瓦師寺嶋家の文書によれば、当時寺嶋が独占していた大坂三郷町への瓦供給に「他国ならびに泉州在瓦」が流通し、これを禁止するお触れが18世紀の後半に繰り返し出されている。また天保7年(1836)、和歌山城下の東西瓦屋町「瓦屋仲間願書」では、泉州瓦を利用する場合は慣例に従い、地瓦と半々で購入するようお願い出ている。この泉州瓦を代表するのが谷川の瓦であった。

一方、粉河製の瓦については、同じ「瓦屋五郎兵衛」の箋書きを持つ瓦が、打田町の紀伊国分寺本堂(元禄13年・1700)で発見されている。五郎兵衛は当時、粉河近辺で活躍した瓦師だったのであろう。

谷川瓦の軽くて規格性の高い性質は、長距離輸送に有利に働き、手間を省いた製作技法は生産コストを抑えて価格の低下を可能にする。品質と価格を武器に、近隣諸国へ販路を拡大していこうとした意図が、瓦そのものから読み取れるのである。こうした谷川の努力が、地元瓦屋の危機感を煽り「地瓦と半々」という慣習を生む。大門の屋根瓦は、まさにその慣習をあらわす実例であった。そして大門の建立から1世紀ほど後の19世紀に入ると、その慣習も守られなくなっていくのである。

(川戸 章寛)

表 「大門瓦勘定帳」の記載内容

区分	粉河瓦屋五郎兵衛			谷川瓦屋加兵衛		
	員数	金額(匁)	単価(匁)	員数	金額(匁)	単価(匁)
丸	2,020	626.20	0.310	2,085	646.35	0.310
平	4,403	1,364.93	0.310	4,690	1,453.90	0.310
わりのし	233	76.61	0.329			
めんと	90	7.20	0.080	110	8.80	0.080
かにめんと	40	1.80	0.045	42	1.89	0.045
角巴	2	3.00	1.500	2	3.00	1.500
角唐草	2	6.00	3.000	2	6.00	3.000
巴	182	56.42	0.310	225	69.75	0.310
唐草	170	52.70	0.310	221	68.51	0.310
二ノ平	45	20.25	0.450	45	20.25	0.450
とりふすま	20	46.00	2.300	11	25.30	2.300
ふすま	257	159.34	0.620	83	51.46	0.620
輪違	532	53.20	0.100	1,080	108.00	0.100
きく	414	53.82	0.130	120	15.10	0.126
鬼	9	158.00	17.556	9	158.00	17.556
すしかい平				76	23.56	0.310
敷ひら				204	31.62	0.155
丸すしかい				60	18.60	0.310
葺手間	21	58.00	2.762	22	43.50	1.977
合計		2,743.47			2,753.59	

※単価は員数と金額より算出した値

## 和釘の強度と耐錆性 —分析と考察—

木造建築には釘が必須である。釘には伝統的な和釘と、明治以後の洋釘がある。和釘は砂鉄をたたらで生成した和鉄を鍛造し、断面は矩形。洋釘は鉄鉱石を溶鉱炉で溶かした洋鉄の線材を成形し、断面は丸く丸釘ともいう。

和釘と丸釘の差は、解体修理の時に顕著になる。丸釘は錆びが膨張し引き抜きが困難で切らねばならないが、和釘は例えば重要文化財粉河寺大門は宝永4(1707)年建立だが、当初釘のうち10,800本が再利用可能であった。錆が表層で止まり、抜くのが容易であった為である。なぜ和釘は錆び難いのか、こうした特徴を解明するため、以下の分析と実験を行った。

### 1. 材質調査 (大阪精工株式会社による)

#### ①成分分析

サンプル	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Cr	Mo	Al
当初釘	0.13	0.06	<0.01	0.049	0.006	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.025
工業用純鉄	≤0.02	≤0.03	0.2~0.3	≤0.03	≤0.03	≤0.25	≤0.15	≤0.15	—	—

現在の鉄の錆びはマンガン(Mn)に原因があると言われる。コークスに含まれる硫黄(S)は溶鋼の流動性を良くするが鋼を脆弱にする。Mnと結びつけMnSにすると、割れにくくかつ加工性を損なわない。しかしMnは鉄の耐食性を著しく低下させ、MnSは“打ち込み”と呼ばれる局部腐食すなわち内部深くに錆を誘発する。比較サンプルには不純物の少ない工業用純鉄を選んだが、当初釘と比較するとSとMnは多い。和鉄は木炭を用いるのでSは含まれず、また何度も折り畳み鍛造するので断面が積層になり、各層で錆の進行が止まると考えられている。

#### ②硬さ試験(強度)

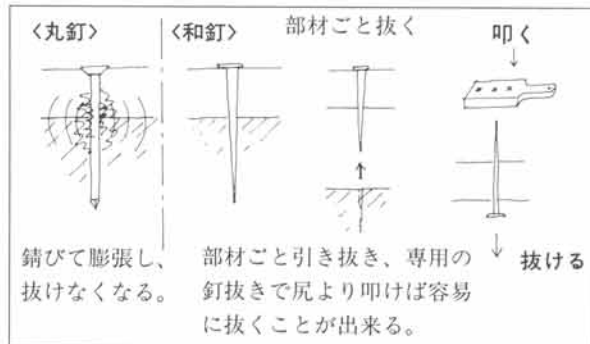
不純物を全く含まない純鉄は柔らかい。強度を出すには炭素を混ぜるが、炭素量が1%を越えると弾力をなくし、多すぎると折れ易くなる。大門の和釘は、硬さが不均一で、炭素量0.10~0.60%の硬い層と、0.01%以下の軟かい層の二層構造であった。

#### ③顕微鏡試験

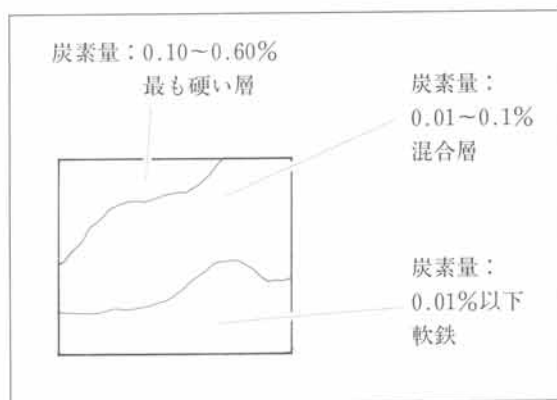
組織は大きく二層に分かれ、横方向に延びる。また両側面が切断されていることから、板状



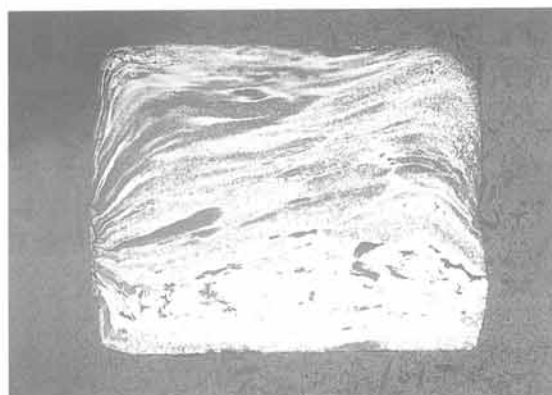
粉河寺大門当初鉄製金具各種



和釘と丸釘の違い



当初釘 断面の硬さ



組織の流れ（顕微鏡写真）

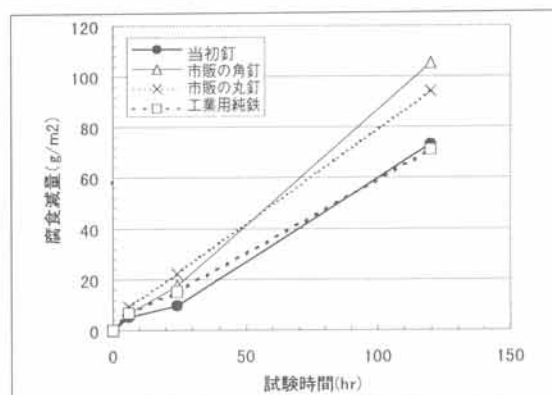
の鉄をタガネで棒状に切断し、釘に仕上げたと推察出来る。和釘は堅い木でもしっかり打ち込める強度がある反面、木材内部を曲がって進行する柔らかさも持っている。建物の変形に合わせてしなるとも言われており、こうした性質は、組織の二層構造に起因するのかもしれない。

## II. 腐食試験（神戸製鋼所による）

噴水噴霧試験（JISZ2371に準拠、120時間）と、屋外暴露試験（9日間）を行った。

塩水噴霧し、腐食減量（単位面積あたりに発生した錆量）を計測した。当初釘は市販の釘に較べて約40%腐食減量が少ない。

表面錆発生状態経時変化は、錆の発生は市販の丸釘が一番早い。当初釘と工業用純鉄は発生が遅い。6日目以降は工業用純鉄より当初釘の赤錆の発生がやや多くなって来る。



噴水噴霧試験

以上の結果から、当初釘と工業用純鉄がほぼ同等の耐錆性を持つことがわかった。

## III. 考察

当初釘は、組織は積層で硬さも不均一で、均質な組織を目指す現在の製鉄法とは全く違うシステムで製造されていることが分かった。今回比較に用いた工業用純鉄は不純物が少ないために耐錆性も持ったと考えられるが、和鉄自体は元来錆びにくいものであった。しかし明治以後、生産性や価格に押され、洋鉄が普及するとともに和鉄の特性は忘れ去られていったのでは無いだろうか。修理工事という時間も予算にも制限があるなかでは、旧来と同様の技法の和鉄や和釘を作ることは難しい。今後は、当初釘を出来る限り再用することを心掛けると同時に、和釘の利点を現在の鉄でどのように表現するか、その手法も開発しなければならないだろう。（鈴木 徳子）

〈参考文献〉井垣謙三「古代上質鉄の探求」『古文化財の科学』29、1984

白鷹幸伯『鉄、千年の命』草思社、1997

島根県吉田町「鉄の歴史博物館」の柳楽氏、川崎製鉄(株)技術研究部の白井幸夫氏にも御教示頂きました。



## 橋本における町家の編年指標について（2）

和歌山県域民家の編年指標作成のための基礎的調査研究 その2

### はじめに

和歌山県北部の町家建築の編年指標を作成することを目的の一つとし、橋本市中心地区（橋本市橋本・古佐田・東家）の町家の調査を、長岡造形大学と共同でおこなっている。前稿<sup>1</sup>では、一連の調査をもとに、主要な編年指標について指摘をした。

昨年度末に調査をおこなったIN家、KH家は、建築年代は不明だが、18世紀中後期と考えることができ、県内最古級の町家と判明した。両棟は橋本の紀ノ川河岸に連続して建ち、宝暦年間の鬼瓦を有するIY家、NT家にも続く。和歌山県内を見回しても、管見の限りこのように古い町家が連続して建つ地区はない。本稿では、この4棟の町家の構造に焦点をあてて折置組と京呂組の関係について、編年的検討をしてみたい。

### 4棟の18世紀中後期建築の町家

IY家は享保年間に当地に移り住み、江戸末期には紀州藩本陣をつとめた。主屋は宝暦2年（1752）の鬼瓦銘から、建築年がわかる。県内では年代の判明する最古の町家建築である。土間部は大きく改造されているが、座敷部はよく残る。

NT家は明治前期に当敷地を購入して移り住んだ。代々塩屋を営む橋本の商家らしい家である。購入前は元造り酒屋であったという主屋は、宝暦4年（1754）の鬼瓦銘を有する。構造や座敷部の意匠は2年早いIY家とよく似ている。

IN家は明治後期頃に、2つの家に分割所有され、所有者が幾度も入れ替わった。分割は正面側では、間口を2間と5間にわける。服飾店などを営んだ関係で、非常に改造が大きい。5間側のほうは、さらに屋根を大改造して、つし二階を造っていた。建築年は不明だが、屋根裏から祈禱札<sup>2</sup>が16枚見つかり、このことや建物形式から明和年間（1764-1772）の建築と推定した。

KH家もまた2つの家に分割所有されている。時期は不明だが、江戸末期頃にはすでに分割があったようだ。こちらは4間と3間に分ける。しかし、土間であった4間分は、6年前に取り壊した。今回は3間分のみの調査である。建築年は、蛤刃形のチョウナ痕があることや、ていねいな瓜剥きの梁、6.6尺と間延びした柱間から、18世紀前中期まではさかのぼると考えた。



IY家

NT家

IN家

KH家

折置組と京呂組の編年的検討

以上の橋本河岸地区に並んで建つ4棟は、いずれも18世紀の遺構と判明、あるいは推定でき、編年を検討するには格好の対象である。梁の組み方は図に示した3通りがあった。AとBは全国的に良く見ることのできる組み方である。しかしCの組み方は他に例をみない。

Aはいわゆる折置組で、IY家で用いる。当家は正面側軒先にさらに腕木を付け、出桁<sup>iii</sup>とする。これまでの調査では、Aは付属屋をのぞき橋本ではIY家のみで、年代の判明する最古の遺構であることから、もっとも古い形式と見てよい。

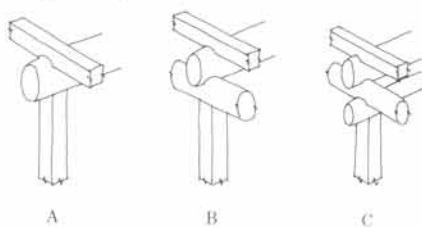
Bは京呂組。橋本の町家では、明治前期までは、最も一般的な形式。梁下に敷桁を置き、その上で梁を乗せ軒桁を受ける。KH家とNT家で使い、ともに敷桁は1尺あまりの大材となる。IY家より2年遅いだけのNT家で、京呂組を採用するのは、その転換を考えると非常に示唆的である。しかしIY家より建築年が古いとみたKH家でも、このBの組み方を採用する。

Cはいわば折置組と京呂組の折衷形。断面の小さな梁をまず柱に掛け、その上で、敷桁を置いて京呂組に小屋梁を掛ける。小さな梁は二重梁の下梁に相当するが、断面は5寸程と、梁にしてはやや小さい。どちらかという、繋ぎ材に近い。多くで見るBは、敷梁を置くことによって、側まわりを強固に固めることができ、また、ひいては柱配置を自由にすることにつながる。しかし、大材の敷桁上に梁木口を載せるのは、非常に安定を欠く。Bを採用するKH家では梁は渡りあごで乗るだけで、柱重ほぞがなく、構造に不安があった。側桁筋の開き止めが欲しいところである。京呂組は発達すると、柱の重ほぞが上まで通るが、この整備以前に側柱開き止めを付けたのがC例ではないだろうか。このように、変則的な組み方をするのは、AからBへの移行過程での、過渡的なものと考えることができる。

おわりに

調査地区は橋本市による土地区画整理事業地区で、以上のIN家、KH家は調査直後に取り壊された。この調査は昨年末より、長岡造形大学が市より正式に調査委託を受けた。調査は3カ年計画で、平成14年3月には調査報告書を刊行する。 (御船 達雄)

- i 『(財)和歌山県文化財センター年報1998』1999年6月
- ii 年記のあるものは、宝暦13年で、その他は明和年間である。明和元～9年と続く。このうち明和2・3・4年は複数枚あった。これらを束ね、荒縄で棟束にくくっていた。
- iii 挿腕木形式の出桁は、これまで一般に建築の格式化のために用いたと考えられてきた。しかしIY家に見るように、折置組によって生じる外壁への無骨な梁木口突出を隠す効果もあるように思える。このような問題意識も必要であろう。



三種の梁組

構造の編年表

家名	建築年	本屋桁行	本屋梁間	間取り	梁組	つし二階	登り梁	母屋階	本屋軒高
IY家	宝暦2年(1752)	6間半	4間	整形4間	A	有	有	2間4割り4.0m	
NT家	宝暦4年(1754)	6間	4間	整形4間	B	有	有	2間3割り5.0m	
IN家	明和年間(1764-1771)	7間	4間	整形4間(3間並列有)	C	なし	なし	2間3割り4.1m	
KH家	18世紀前中期	7間	4間	整形4間	B	有	なし	2間3割り3.9m	

## ベトナム・ホイアン旧市街地文化財建造物保存修復（２）

1991年度より文化庁が支援しているベトナムクアンナム省ホイアン市旧市街町並み保存事業において、1998年度に続き1999年4月に3週間、現地にて文化財建造物修復の技術移転を主眼とした技術協力を行った。

18世紀にさかのぼる木造の町屋が散見されるホイアン旧市街は、その伝統的な町並みが評価され1999年12月に世界遺産に登録された。17世紀には日本人街が存在するほど日本との交易が盛んにおこなわれ、現在も街の象徴でもある橋に『日本橋』の名が残るなど日本との関係は非常に深い。ホイアン旧市街地の世界遺産登録は、日本の文化財保存に関する国際協力が大きく係った初めての事例であることも特筆すべき事であろう。

日本橋は幅約5m、長さ約11mの石造の橋脚を持った木造の屋根付橋である。東西にかかる橋の両端入り口部は別棟の平入りとなっており、中央部北側には橋と同様に石造橋脚上に間口約7m奥行き約9mの北帝御堂が建てられている。全体に小ぶりの橋であるが、中央部がアーチ状にせりあがり、華麗な屋根飾り、朱色の塗装などホイアン市のシンボルマークにも用いられ、愛されている。また、この橋が位置するチャンフー通りは、古くからのメインストリートであり、現在も市民の日常の主要な交通路としての位置づけは変わっていない。



日本橋

1997～8年度には日本隊が日本橋の事前調査を行っており、1999年1月より解体修理が施工される予定であったが、世界遺産登録直前という状況もあり、今回の修理は見送られた。日本人土木専門家の現地調査により、建物の不同沈下は橋脚下部の木製杭の腐食によるものであることが判明し、基礎からの根本修理が必要となった。これにより修理方針を再検討することになったことが主な要因であるが、解体によりこの橋が短くない期間無くなることへの地域住民の同意が得られなかったことも重視しなければならぬ。

日本橋は修理が重ねられていることもあり木材など個々の状況は比較的良好である。しかし、橋脚の沈下等を放置したままの状況的な修理を繰り返しているため全体に歪みが生じ、仕口のゆるみなどは限界にきている。特に柱位置が改変されている御堂の破綻は著しく、橋との取合いのつなぎ虹梁もホゾが抜け支柱で支えられている。このため、技術移転という本来の目的を見据え、将来の修復に向けての詳細な破損調査・構成部材調査作り及び類例調査をホイアン市遺跡保存監理センターの建築技術職員と共同で行った。伝統的町並みを保存していくには文化財専門の建築

技術者を常駐させることが不可欠であるが、経済成長期のベトナムで地方常駐技術者の人材確保は困難である。ホイアンでは1998年度になり懸案であった建築技師としてフォン ダイタン氏を招聘した。ハノイ建築大学の新卒で文化財修復の経験知識はなく、現在保存地区の確認申請の処理を行っている。

調査作業を進めるにあたり、伝統建築を専門としないタン氏は、戸惑いながらも不陸調査や構成部材の詳細な実測には興味を持って挑んでくれたが、類例の構法や様式の歴史的調査はその必要性が理解できないようであった。

『日本橋』は棟札や石碑の銘より嘉隆16年(1817)に根本的な改築がなされ、嗣徳28年(1865)啓定2年(1917)比較的大規模な修復がなされたと推定されさらに1986年にも修理が施されている。しかし、修理の具体的な内容等は判っておらず、修理歴の資料となるよう彫刻部分の様式的特徴・柱の面取り(隅入り)幅・仕口痕跡・材種などを調査し、部材の時代区分に備えた。特に木材はホイアンでの修復工事に携わってきた大工に、石材は石の産地五行山のベテラン石工に材種、産地などの鑑定を依頼した。これらにより数多くの情報が得られたが、現在のところ調査の成果はあくまでも断片的なものであり、生産史的背景を系統立てて考察するには至っていない。

ホイアンにおいてハノイの文化財修理技術者によって修復された町屋の事例を見ると、部材の破損調査や取り替え材のチェックなど十分な配慮がなされているに関わらず、地方固有の歴史的調査の欠落など、結果的に日本の修理理念との差異を感じずにはいられない。日本橋の修復に関しても関帝廟など来歴が明確な近隣建物に様式上共通の特徴を有するものもあり、遺跡保存監視センターで進められている古文書や発掘調査、近隣の大工集落の調査成果等基礎的研究の充実が望まれ、精緻な論考がなされることが期待される。これらの成果が明確に反映された修復を行うことで技術移転の目標が達せられるのではないだろうか。(多井 忠嗣)



構成部材寸法実測 (タン氏)



日本橋入口差し肘木



関帝廟：中古材の混在

## 海外研修報告 韓国

平成11年11月8日(月)から同13日(土)迄の6日間、全国埋蔵文化財法人連絡協議会主催の「韓国研修」に団長として参加した。以下はその報告と感想である。

穏やかな晩秋の韓国古都への研修の旅は、私たちが韓国の悠久の歴史の中へといざない、いつの間にか我が国の歴史的風土と一緒にってしまったのは何であったのであろうか。

韓国の深い文化の源流が、戦争という悲しい時代があったにせよ、それを超えて、今尚、地下水のように、とうとうと我が国との間を流れていることを感じる。

最初の訪問先は釜山。ここはかつての伽耶の中心地。日本では、この地に四世紀半ば大和政権が任那日本府を置いたと言われていたところ。私の目当ては福泉洞10号墳出土の馬冑。馬にかぶせるカブト。韓国では18例、日本では2例しか発掘されていないと言う。しかし目当ての馬冑は、なんと佐賀県に貸出し中で明日帰って来るとのこと。釜山広域市立博物館の展示コーナー「日本中の伽耶の遺物」の中に、和歌山市大谷古墳出土の馬冑のレプリカが展示されていた。



陵山里古墳群を背後から望む



国立公州博物館

次は慶州。紀元前57年から935年迄の1000年もの間、新羅の都として仏教文化が開花したところ。国策として保存されている瓦屋根や門構えの、古都をしのぼせる街並みや農家の家々が美しい。仏国寺を始め国際的な観光地として多くの名所旧蹟が保存され、今も王京遺跡を中心に発掘が続けられている。

その次は公州と扶余。日本の飛鳥文化に多大の影響を及ぼした百済の古都。共に韓国三大河川の一つ錦江のほとりにある。この河の中流は白村江と呼ばれ、663年百済を助けた日本軍が、新羅・唐の連合軍と戦って敗れた古戦場でもある。バスの車窓からは平野部の向こうにかすんでしか見えなかったが、あの河を通して仏教文化が日本へ



伝わったのだと思うと感慨も一入。古墳群や国立博物館の展示品を見ていると何となく懐かしい。

最後はソウル。百済の最初の都。1392年から1910年迄続いた朝鮮王朝の古都。ここには新石器時代の岩寺洞住居遺跡から朝鮮王朝の栄華を伝える景福宮迄多くの史跡や文化財がある。一番興味を引いた



復元工事中の景福宮

のは、石村洞積石塚古墳群の三段式石製墳墓。我が国の割石を使った横穴式石室の源流は、高句麗から百済へ、そして百済から日本へと伝わったというふうに考えられており、ああこれが百済の割石による墳墓かと目のあたりに見ることが出来たからである。

想えば、釜山での東組と西組が合流しての結団式。21人のメンバーの出会い。そして数日後、ソウルでの解団式。全員元気に、それぞれの想いを胸に帰国の途についた。

お世話を頂いた事務局の大阪府のみなさん、大変お世話になった訪問地の韓国のみなさん、それに73才の高令とはとても思えぬ、はつらつとしたガイドの洪（ホン）さん。洪さんにはビジネスを超えたオモニの温かい韓国の心を見る想いがした。

韓国への海外研修は、私たちに近くて遠い韓国が、近くて近い韓国へといざなってくれた。この研修を今後とも続けていくことの必要性を改めて思った。

(中谷 博昭)



仏国寺門前にて

## 海外研修報告 中国

本年度の全国埋蔵文化財法人連絡協議会が主催する海外中国研修は、<sup>あんき</sup>安徽省および河南省を選定し、「日本文化財保護研究者訪中国」を結成して、遺跡と博物館等の見学や地元研究者との交流を通じて見識を深めた。協議会にとっては、初の東西合同中国研修である。

研修参加者は、北海道から鳥取県まで15団体から計27名で、当文化財センターからは埋蔵文化財課土井孝之が参加した。研修期間は、11月19日から26日までの8日間である。

今回の海外研修の中心となった安徽省は、世界史的に見ても重要な地域の一つであるにもかかわらず、諸外国の訪問者にとっては、考古学的に触れ合う機会の少ない地域であったと聞く。安徽省は、中国南東部に位置し、北から山東省・江蘇省・浙江省・江西省・湖北省・河南省に接している。省域は南北に長く、中部から南部にかけて平野（華北平原）が広がり、南部に山地がある。その間を縫って長江（揚子江）が流れ、北部よりには中国第三の<sup>わいが</sup>大<sup>わいが</sup>河<sup>わいが</sup>淮<sup>わいが</sup>河<sup>わいが</sup>が流れる。

以下、訪問順に全行程と研修内容を、その時の感想を交えて記すこととする。

### ☆11月19日（金） 関西国際空港→上海虹橋空港→安徽省<sup>ぼあんざん</sup>馬鞍山市

初日は、成田・関西国際空港の両地域から出国し、上海で合流する予定であった。ところが、上海からの航空機到着のトラブルで18時30分関空発と5時間の遅れとなった。アクシデント第1弾である。予定どおり上海に到着していた成田出発組と無事合流できたのは現地時間（以下、同）午後8時30分をまわっていた。この時点で研修に同行して案内を頂く安徽省文物考古研究所主任の張敬国氏とガイド役の上海市現代管理研究センター王邦文氏も加わる。

安徽省最初の宿舎、馬鞍山市の富園飯店に辿り着いたのは、20日の午前1時を過ぎていた。

### ☆11月20日（土） 馬鞍山市→<sup>ごうひ</sup>（合肥市）→寿县

午前9時、最初の見学地、三国朱然墓園に到着する。三国呉の名将朱然の墓である。磚柳墳で前室・墓道をもち、遺構全体が覆屋で保存展示され、施設の拡張時に発見された朱然一族の墓も隣接して覆屋に納まっている。また、豊富な出土品の展示室も併設されている。

馬鞍山市街を通過して、フェリーにバスを載せて河幅4kmの長江を渡る。凡そ30分で長江北岸に着岸する。

その後、寿县博物館を訪ねようと急いだが、途中の地方道で交通事故のため道路閉鎖に遭遇する。アクシデント第2弾である。待機時間を利用して、張敬国氏の講義を国際交流



馬鞍山市 朱然墓にて

サービス辻田順一氏の通訳を挟んで拝聴する。既に2時間が経ち、ついに予定ルートを諦め大きく迂回して、宿泊地へと向かう。昨日同様に宿舎への到着は大幅に遅れ、城壁に囲まれた古都寿県の宿舎寿州賓館に着いたのは午後9時を過ぎていた。

☆11月21日（日） 寿県→蒙城県→亳州市

まず、前日に見学する予定であった城門（賓陽門）と城壁を見学する。淮河流域の要衝寿県は、春秋時代には蔡国が42年間、戦国時代には楚国の春申君が19年間、また漢淮南国の都が62年間置かれていた。周囲約7kmを城壁に囲まれ、1986年に中国歴史文化名城にも指定されている。

次いで寿県博物館に向う。博物館は報恩寺という仏教寺院の旧境内を利用している。旧山門を入ると、塔跡横に梵鐘が地面に据え置かれており、長興3年（932）銘から後唐の逸品とわかる。展示は、商代から南北朝時代の考古遺物等が年代順に、コンパクトにまとめられている。

寿県城を出て、郊外の漢淮南王劉安墓（未調査）に到着し、墳丘外周を見学する。劉安は豆腐を初めて作った人と伝えられ、「豆腐発祥地」の碑も建立されている。

さらに淮河に架かる鳳台淮河大橋を渡り、凡そ2時間、同じような風景の農村集落や町並みをいくつか走り抜け、蒙県県の中心地蒙城に到着する。まず、蒙城博物館を訪問する。展示の中心は1994年中国十大考古発見の尉遲寺遺跡の出土品である。尉遲寺遺跡では、新石器時代約4600年前の集落・墓跡が検出され、集落・墓を環状に取り囲む塚が発見されている。その後、荘子の祀られている荘子廟（建設中）に立寄った後、亳州市へ向う。

亳州市へ入り、午後5時前から曹操ゆかりの遺跡を見学する。まず、旧城内市街地の地下に磚積みでつくられた縦横に走る軍事用の地下道、地下運兵道を巡る。

次いで亳州市南郊の曹氏家族墓に移動する。日が暮れてしまったが、1970年代から調査された2基の後漢墓を見学する。董園二号墓は切石の七つの石室を持ち、曹氏の始祖、曹操の父の養父曹騰を葬る。近接する張園一号墓はドーム状の天井をもつ磚室墓で、多室の複雑な墓室構造や四神などを表す画像石をもつ点は二基に共通しており、見応えがあった。



亳州市 花戲樓（亳州市博物館）にて（中国研修事務局撮影）

☆11月22日（月） 亳州市→河南省  
永城県芒山鎮→亳州市

朝8時30分に宿舎を出て、市内北部にある亳州市博物館を見学する。博物館は大関帝廟の境内を利用しており、廟の南門が花戲樓と呼ばれ、北面は絢爛豪華な劇場舞台となっている。展示室

では、銀縷玉衣ぎんるぎょくいなどをはじめ曹氏家族墓の出土遺物も見ることができた。

次に曹氏家族墓を取込んだ曹氏公園に移動し、一部の墳丘にのぼる。曹操の家族墓は全部で11基あると聞く。公園内には4基の円形の封土墳が整備されている。郷土の英雄と称えられる曹氏族の墓域を対象に、市南郊の大規模公園として整備が進められている。その後立寄った交易大廊では、あらゆる漢方薬の材料が集められており、満ち溢れんばかりの活気を呈していた。



河南省芒山鎮 柿園漢墓にて

昼食後、この研修の一つ目の見所、前漢梁王家の墓域である河南省永城県芒山をめざして出発する。直線距離でみると80km足らずの行程であったが、道中で数々の苦難に遭遇し、芒山鎮の集落に辿り着いたのは午後9時をまわっていた。アクシデント第3弾である。

案内を受け、午後10時前からおよそ2時間かけて丘陵上に所在する漢墓群を見学する。月明かりの照らす中、柿園漢墓、梁孝王后墓、梁孝王墓の内部と孝王墓に伴う寝園遺跡をみる。前漢5代文帝の子で梁王に封じられた孝王にはじまる梁王家の墓域である。いずれも紀元前二世紀、墓室は岩盤を削り貫いて造られている。最初に入った柿園漢墓は、主室の天井に彩色の三神図が描かれ、その規模の大きさに驚かされる。また后墓の規模はさらに巨大で、造りは丁寧である。

最後まで諦めずに見学できたことに感謝しながら、午前1時前、漢墓を後にする。無事亳州市の宿舎に帰り着いたのは明け方4時20分であった。

☆11月23日（火） 亳州市→列車にて→合肥市ごうひ

寝むる間もないまま、7時40分発の合肥行特快列車に乗車し、1時間遅れで合肥に到着する。この程度の遅れはアクシデントに感じない。昼食後、市内中央部にある安徽省博物館に向かう。

博物館では 長江流域の新石器時代の良渚文化りやうしよと対比される薛家崗文化べっかこう（潜山県）の陶器・玉器をはじめ、凌家灘遺跡りやうかたんのある含山県出土の見応えのある遺物が展示されている。すでにその土地に接している寿県の蔡侯墓や楚王墓の巨大な青銅器や、現地を訪れた亳州市の董園2号墓の画像石の拓本なども見ることができた。「徽州古建」と題した、省南部の黄山地方を中心とする建築物の展示も、組物を使った展示や変化をもたせた陳列で充実したものであった。

夜には、安徽省文物局の李虹副局長、省文物考古研究所の楊立新所長、同張敬国主任らを囲んで歓迎交流会が行われた。

☆11月24日（水） 合肥市→含山県→巢湖市→合肥市

本日は、研修の二つ目の見所、5300年前の祭壇状遺構が発見されている凌家灘遺跡へ向かう。同行の文物考古研究所張敬国主任が、調査責任者として1987年の遺跡の不時発見以来携わり、祭壇を含む墓域の発掘と、紅焼土域（宮殿域）・居住域を含む遺跡範囲の確認を進めてきたとのことである。現地で張主任自ら中国式ボーリングステッキ（洛陽鐘）<sup>らくやうしん</sup>を使っての土層確認調査の実演もまじえて、直接の解説で凌家灘遺跡の状況を目の当たりにする事ができた。



含山県 凌家灘遺跡にて  
（中国式ボーリングステッキの実演）

凌家灘から、巢湖市東郊まで戻り、前漢後期の高級官吏の墓、放王崗漢墓へ向かう。まず『放王崗漢墓原址展廟』には、原位置で木槨墓が復元されており その内部構造の規模と作りに感激させられた。併設して出土遺物の展示館『巢湖漢墓出土文物精華』があり、被葬者の名を示す玉印「呂珂之印」<sup>ろか</sup>をはじめとし、市内発見の漢墓から出土した豊富な品々を見学することができた。

合肥に戻り、午後5時過ぎに安徽省博物館に近い省文物考古研究所を訪問する。楊立新所長の歓迎の挨拶を受けた後、午前中に現地を見学した凌家灘遺跡出土の玉髓製玉璧、透閃石製玉竜・玉人・玉鷹<sup>ぎよくやう</sup>・石錐などの超逸品の品々を中心に張主任の解説で見せて頂くことができた。

#### ☆11月25日（木） 合肥市→中国東方航空にて→上海直轄市

昼まで上海市の中心街（南海路）で上海友誼商店へ行くなど若干の自由行動をとる。午後2時から上海博物館を表敬訪問し、その後館内を見学する。上海博物館は1952年に開館した中国古代芸術博物館が前身建物であり、現在の博物館は、1996年に人民大道に新築されたものである。建築面積は38,000㎡で、建物は地下二階、地上五階と壮大なものである。館内は青銅器・陶磁器・絵画・印璽・玉器・少数民族工芸などの十の陳列室と三つの展覧会場がある。

その夜は、とうとう研修最後の晩餐となった。

#### ☆11月26日（金） 上海浦東空港→関西国際空港（解団式）

最終日は、新興の浦東地区内の宿舎を出発、開港後間もない上海浦東空港に着いて出国手続きをする。12時35分の全日空機で関西空港に向かい、最後はトラブルもなく定刻どおり関西空港に到着する。挨拶を交わし15時50分、多くの成果と意思をもって中国研修団は解散した。

なお、連絡協議会の初の試みとして、韓国研修と共に平成11年度『韓国・中国研修記録』（全国埋蔵文化財法人連絡協議会事務局）として記録集が刊行されている。

最後に、今回の研修に当り、ご指導を頂いた安徽省文物局の李虹副局長、省文物考古研究所の楊立新所長、同張敬国主任をはじめ関係諸機関の皆様にご心から感謝申し上げます。（土井 孝之）





建造物保存事業中堅技術者研修会	平成11年10月25日～27日	群馬県松井田町
(5) 建築保存事業技術者養成研修会	平成11年5月10日～21日	滋賀県近江八幡市
建築保存事業技術者養成研修会	平成11年6月28日～7月16日	奈良県奈良市
建築保存事業技術者養成研修会	平成11年11月8日～7月16日	東京都
(6) 建造物保存修理主任技術者等連絡協議会	平成11年10月12日	東京都

### III 普及事業

#### 1 現地説明会

藤倉城跡発掘調査	東牟婁郡那智勝浦町中村 ～川関 地内
	平成11年6月5日(土)
徳蔵地区遺跡発掘調査 (主催：南部町教育委員会、南部川村教育委員会)	日高郡南部町気佐藤 ～南部川村徳蔵 地内
	平成12年3月11日(土)
西庄遺跡発掘調査	和歌山市本脇・西庄 地内
	平成12年3月18日(土)

#### 2 見学会

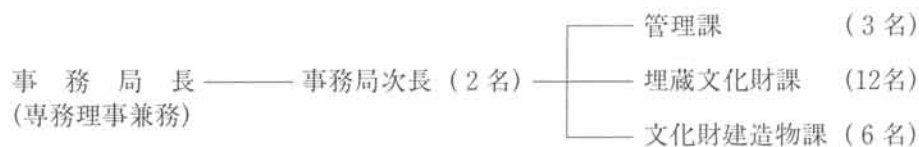
高田土居城見学会	上南部中学校 全校生徒	平成12年3月7日(火)
----------	-------------	--------------

### IV 刊行図書

『謎の古代豪族紀氏』 (財)和歌山県文化財センター編

### V 和歌山県文化財センター組織表

理事長 1名      副理事長 2名      専務理事 1名      理事 9名  
 評議員 14名      監事 2名



### VI 職員名簿(平成12年3月31日現在)

事務局長(専務理事兼務)      中谷 博昭

